『源氏外伝』諸本考・序説

妹尾好信

【キーワード】源氏外伝・熊沢蕃山・源氏物語

はじめに

『源氏外伝』は、江戸前期の儒学者熊沢蕃山（元和五年〈一六一九〉～元禄四年〈一六九一〉）の著になる『源氏物語』の読解・評論の書である。その儒教的経学思想に基づいた物語の論評は、客観的・実証的な文学研究からはほど遠いが、中世以来の師資相承による伝統的な源氏学や国学者の古典研究とは大きく異なる個性的なもので、近世における『源氏物語』享受史上異彩を放っている。後世に大きな影響を与えることはなかったが、蕃山の門人であった中院通茂の『源氏註』には直接的な影響を与え、安藤為章の画期的な源氏評論『紫家七論』にも影響を及ぼすなど、その意義は小さくない。

現存する伝本は多いが、近代になって活字刊行されるまで版行はされず、すべて写本で伝わっている。大きく流布本系と、それより分量の多い異本系の二系統に分けられることが知られているけれども、これまであまり詳しい伝本調査は報告されていない。

筆者は、この十数年間、『源氏外伝』に注解を加える作業に関わってきた（「略注『源氏外伝』（その一）～（その十四）」『大分大学教育学部研究紀要』第12巻第1号〈平2・3〉～『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第24巻第2号〈平14・10〉）。このたびその仕事が一通りの完結を見たのを機に、諸伝本の調査と整理を試みることにした。いまだ多くの伝本のうち一部しか調査しえていないのだが、本稿では、ひとまず途中経過の報告として、諸本の伝存状況の概観と、奥書・識語の種類による大まかな分類・整理を行なおうとするものである。

一　諸伝本の概観

『源氏外伝』の伝存状況を概観するために、まず、『国書総目録』第三巻（昭40　岩波書店）の記載を見ると、次のようにある（補訂版に追加・削除なし）。

源氏外伝（げんじがいでん）　四巻四冊　㊀源語外伝・源語評・源氏物語抜書

類物語・評論　著熊沢蕃山　成延宝初年　写国会（三十幅七）（三十幅一五・一六）（二冊）・内閣（四冊）（「源氏物語抜書」、三冊）（下、三十幅二）・静嘉（享保五写一冊）（二冊本二部）・宮書（片玉集後集四三一四五）・岡山大池田（二冊）・京大（寛政元写）・京大谷村（寛政二写二巻二冊）・教大（天明四写二冊）（三十幅一五・一六）・実践・清心女大・東大（二冊本二部）（享和・文化頃写一冊）（一冊）・東北大（五巻二冊）・阪大（五冊）・秋田・大阪府石崎（五冊）・岡山県（二冊）・日比谷東京（二冊）・宮城伊達（二冊）・岡山市（延享五写）・刈谷（一冊）・豊橋・尊経（「源語評」、三冊）・正宗（五冊）・無窮神習（「源語外伝」、穂積保佑写二冊）（玉篤二二五）・祐徳（一冊）・陽明（五巻三冊）・旧彰考（二冊）・延岡内藤家（「源語評」、天明八写三冊）　活国文学註釈叢書一四・国文註釈全書一五・蕃山全集二・三十幅一・源氏物語蕃山抄（昭和一〇）

全部で三十九点の写本が記載されている。次に、『国書総目録』の続編である『古典籍総合目録』第一巻（平2　岩波書店）を見ると、五点の写本が追加される（ただし、一点は昭和の新写本）。

源氏外伝げんじがいでん　四巻四冊　別源語外伝・源語評・源氏物語抜書　類物語・評論　著熊沢蕃山　成延宝初年　写国文研初雁（「源氏外傳」、昭和四西下經一写二冊　岡山市立図書館蔵本の写）・新潟大佐野（「源語外傳」上下　二冊）・今治河野美術館（天明四高昶写一冊）・弘前（乾存　一冊）・黒羽町作新館（「源語評」天地人　天明八小竹居士写　三冊）

さらに、国文学研究資料館のマイクロ資料目録により検索すると、平成十四年九月現在、次の十三点が挙げられる。先に掲げたものと一部重複するが、新たに五点が追加できる（＊印）。

弘前図　写　一冊
新潟大佐野　写　二冊
＊酒田光丘　写　三冊
秋田県図　写　四冊
＊永井義憲　写　一冊
＊盛岡公民　写　一冊
＊佐賀県図　写　一冊
＊佐賀県図　写　五冊
陽明文庫　写　三冊
今治市河野美　写　一冊
書陵部　写　三冊
筑波大図　写　二冊
刈谷図村上　写　一冊

他に、故池田亀鑑博士の旧蔵書である東海大学附属図書館蔵桃園文庫にも六本が所蔵されている。『桃園文庫目録』上巻（昭61　東海大学附属図書館）によって掲げる。

源氏外傳　二巻二冊　桃一〇・一〇
源氏外傳　二巻一冊　桃一〇・一一
源氏外傳　二冊　桃一〇・一二（外題内題ともなし）

二

源氏外傳　二巻二冊　桃一〇・一三（外題なし。扉題「源語外傳」）
源氏外傳　二巻二冊　桃一〇・一四
源氏外傳　三巻三冊　桃一〇・一五

これらをもとに、各文庫・図書館の目録記載の情報も加えて、諸伝本を列挙してみる（〈　〉内は所蔵者の整理番号）。

1　国会図書館蔵本A（「三十幅」第七冊）一冊〈一一三―一三〉
2　国会図書館蔵本B（「三十幅」第一五・一六冊）二冊
3　国会図書館蔵本C　二冊〈一四五―一五七〉
4　国立公文書館内閣文庫蔵本A（校正本）四冊〈二〇三―四四〉
5　国立公文書館内閣文庫蔵本B（外題「源氏物語抜書」）三冊〈二〇三―一九〉
6　国立公文書館内閣文庫蔵本C（下巻のみ。「三十幅」第二冊、伊東祐膺写）一冊〈二一七―一九〉
7　静嘉堂文庫蔵本A（享保五年写）一冊〈五一三・一〇・二二一六九〉
8　静嘉堂文庫蔵本B　二冊
9　静嘉堂文庫蔵本C　二冊
10　宮内庁書陵部蔵本（藍川員正恭輯「片玉集」後集・第四三～四五冊、外題「熊澤先生源語評」）三冊〈四五八―一〉
11　岡山大学付属図書館池田家文庫蔵本　二冊〈九二三・三・二三〉
12　京都大学蔵本A（寛政元年写）　一冊
13　京都大学谷村文庫蔵本（寛政二年写）二巻　二冊
14　筑波大学付属図書館蔵本A（天明四年写）　二冊〈ル―一二〇―六一〉
15　筑波大学付属図書館蔵本B（「三十幅」第一五・一六冊）二冊
16　実践女子大学蔵本
17　ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵本　四冊〈G二〇一〉
18　東京大学蔵本A　二冊〈中古三一・八・二九〉
19　東京大学蔵本B　二冊
20　東京大学蔵本C（享和・文化頃写）　一冊
21　東京大学蔵本D　一冊
22　東北大学蔵本　五巻二冊
23　大阪大学蔵本　五冊
24　秋田県立秋田図書館蔵本　四冊
25　大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵本　五冊
26　岡山県立図書館蔵本　二冊〈特九一四―二二〉
27　東京都立中央図書館東京誌料蔵本　二冊
28　宮城県図書館伊達文庫蔵本　二冊
29　岡山市立中央図書館蔵本　二冊（もと三冊本の中巻を欠くもの）〈〇九九・一三・Y〉
30　刈谷市立図書館村上文庫蔵本　一冊〈一〇三六〉
31　豊橋市立図書館蔵本

32　尊経閣文庫蔵本（外題「源語評」）　三冊〈四五〇〉
33　正宗文庫蔵本（外題「源語外傳」。天明四年奥書）　二巻五冊〈上西・ウ四―一〇七八〉
34　無窮会神習文庫蔵本A（外題「源語外伝」、穂積保佑写）　二冊
35　無窮会神習文庫蔵本B（「玉篦」第二一五冊）　一冊
36　祐徳稲荷神社蔵本　一冊
37　陽明文庫蔵本（外題なし）　五巻三冊〈近ケ―一二〉
38　旧彰考館文庫蔵本　二冊（ただし、戦災で焼失した本の由）
39　延岡内藤家蔵本（外題「源語評」、天明八年写）　三冊
40　国文学研究資料館初雁文庫蔵本（外題「源氏外傳」、昭和四年　西下經一写、29岡山市立中央図書館蔵本の写し）　二冊（もと三冊本の中巻を欠くもの）〈一一・五六一・一・二〉
41　新潟大学付属図書館佐野文庫蔵本（外題「源語外傳」）　二冊〈三一―二四〉
42　今治市河野美術館蔵本（天明四年高昶写）　一冊〈二四一―二三五〉
43　弘前市立弘前図書館蔵本（乾のみ、坤欠）　一冊〈W九一三・三・二七〉
44　黒羽町作新館蔵本（外題「源語評」　天明八年小竹居士写）　三冊
45　酒田市立光丘文庫蔵本　三冊〈七五八〉
46　永井義憲蔵本　一冊
47　盛岡市中央公民館蔵本　一冊〈六一四〉
48　佐賀県立図書館鍋島文庫蔵本A　一冊〈鍋九九一・二二六五〉
49　佐賀県立図書館鍋島文庫蔵本B　五冊〈鍋九九一・二二五〇〉
50　東海大学付属図書館桃園文庫蔵本A　二巻二冊〈桃一〇・一〇〉
51　東海大学付属図書館桃園文庫蔵本B　二巻一冊〈桃一〇・一一〉
52　東海大学付属図書館桃園文庫蔵本C（外題・内題ともなし）　二冊〈桃一〇・一二〉
53　東海大学付属図書館桃園文庫蔵本D（外題なし、扉題「源語外傳」）　二巻二冊〈桃一〇・一三〉
54　東海大学付属図書館桃園文庫蔵本E　二巻二冊〈桃一〇・一四〉
55　東海大学付属図書館桃園文庫蔵本F　三巻三冊〈桃一〇・一五〉

これらの他にも、池田亀鑑編『源氏物語事典』（昭35　東京堂出版）下巻所収「注釈書解題」（大津有一執筆）によれば、徳島光慶図書館蔵本（戦後焼失か。「阿波国文庫」印のある51桃園文庫B本に該当か）・久松潜一博士蔵本・上野図書館蔵本などの存在が記されており、さらに公私の文庫や個人の所蔵になる伝本も少なからず存することと思われる。たとえば、中野幸一氏の九曜文庫にも少なくとも二本が所蔵されることが知られる（中野幸一「『源氏物語享受影響年表』稿」『早稲田大学教育学部学術研究』（国語・国文学編）第48号〈平12・2〉・第49号〈平13・2〉）し、故稲賀敬二先生の蔵書にも二本が存在する。稲賀先生の旧蔵書は直接披見の機会を得

四

たので、通し番号とともに掲げておく。

56　稲賀敬二旧蔵本A（夢庵文庫旧蔵本）　二巻二冊

57　稲賀敬二旧蔵本B（外題「源語外傳」、本山文庫旧蔵本）　二冊（ただし、もと四冊本の第一・三冊と考えられる）

以上のように、現在管見に入るだけで約六十点の写本の伝存が知られるのである。以下、各伝本に言及する際には、通し番号を付して略称で呼ぶことにする。

二　冊数と巻の編成

『国書総目録』や『古典籍総合目録』などは『源氏外伝』の巻冊を「四巻四冊」としているが、実際の諸伝本の状況は、一冊本・二冊本・三冊本・四冊本・五冊本とまちまちである（16実践女子大本と31豊橋市立図書館本の二本については現在のところ冊数不明）。その中では上下二冊本の形態がもっとも多く、後述のごとく一冊本の中にも明らかに二冊本を合冊したと見られるものがいくつもある。四巻四冊で代表させているのは、近代になって流布した「国文註釈全書」本（明43　國學院大學出版部）と「国文学註釈叢書」本（昭5　名著刊行会）がともに春・夏・秋・冬四巻の形態を取っているためであろうか。「国文註釈全書」本は、その「緒言」によれば、「内閣文庫本ニヨリ松井簡治氏所蔵写本ヲ以テ校合セリ」とあるので、四冊本の4内閣文庫A本を底本とし、7静嘉堂文庫A本で校合したものと知られる。「国文学註釈叢書」本の底本は不明だが、「国文註釈全書」本と全く同じ形態であり、本文もほとんど異なるところがない（奥書も完全に一致する）。また、詳しくは後述するが、「各本の識語を総合すると、蕃山が執筆した五十四巻を中院通茂が整理して五巻とし、さらにそれを四巻にしたのが現在流布するにいたったとする」（伊井春樹『源氏物語注釈書・享受史事典』〈平13　東京堂出版〉）というような流布本成立の経緯が考えられていることから、四巻四冊を本来の形態と認めたのかも知れない。

しかしながら、現存の諸伝本で四冊本の形態を有するのはむしろまれで、先に掲げた五十七本の中では、4内閣文庫A本の他に、17清心女子大本と24秋田図書館本の二本があるだけである。4内閣文庫A本は、春（序・桐壺～夕顔）・夏（若紫～花宴）・秋（葵～須磨（一））・冬（明石（一）～明石（二））という巻編成である（須磨・明石両巻は、通常二度にわたって扱われているので、仮に前のを「須磨（一）」「明石（一）」、後のを「須磨（二）」「明石（二）」と呼んで区別することにする）。ところが、24秋田図書館本は同じ春・夏・秋・冬の四冊から成るものの、春（序・桐壺～帚木途中）・夏（帚木途中～末摘花）・秋（紅葉賀～須磨（一）途中）・冬（須磨（一）途中～藤裏葉）という変則的な編成で、須磨（二）・明石（二）を欠く。これは、この編成が本来のものではなく、二冊本か三冊本かを便宜的に四分冊に仕立て直したものであることを示すであろう。なお、同本は、冬巻の冒頭に須磨（二）の最終項目にあたる記事を二項目に分ける形で載せている。他本からの混入または増補であろう。17清

心女子大本も四冊本だが、第三冊と第四冊の間に葵途中～明石（一）の記事を欠いており、本来は五冊ないし六冊の本だったと考えられる。同本は外題に記す巻序に乱れがあり、第四冊（外題の第三冊）末尾に乱丁がある。

三冊本は、5内閣文庫B本・10書陵部本・32尊経閣本・37陽明文庫本・39内藤家本・44作新館本・45光丘文庫本・55桃園文庫F本がそれにあたる。このうち、32尊経閣本・39内藤家本・44作新館本の三本はいずれも外題が「源語評」とある。これら三本は未見だが、おそらく同類の本であろう。10書陵部本も外題が「熊澤先生源語評」とあるから、やはり同類の本と見なせそうである。この本は津村淙庵（藍川）の編纂した一大叢書「片玉集」の後集に所収されたもので、巻四十三（序・桐壺～夕顔）・巻四十四（若紫～榊）・巻四十五（須磨（一）～明石（一））という三巻の編成である。須磨（二）・明石（二）を欠く。そして、第三冊の須磨巻末尾に、「或云源氏は朧月夜内侍かみの事によせてかくなり給へは罪なしともいひかたかるへきか…（中略）…いんきんに下らうほと無礼おほし是時代のかはり故か」という約三丁半にわたる独自本文がある。実は、これと同じ記事が四冊本の24秋田図書館本にもあり、須磨（二）・明石（二）両巻の記事を欠くこととあわせて共通点が多く、同類の本と見られる。55桃園文庫F本は、外題・巻首の内題とも「源氏外傳」とあるが、内題の脇に「舊名源語評熊澤子著編」とあって、ここにも「源語評」の名が見える。巻構成は、天（序・桐壺～若紫）・地（末摘花～須磨（一））・人（明石（一）～藤裏葉）で、これも須磨（二）・明石（二）の記事を欠く。巻構成は異なるけれども、10書陵部本に近い形態の本である。

5内閣文庫C本は外題が「源氏物語抜書」とあり、特殊な異称を付された三冊本である。巻の構成は、第一冊（序・桐壺～夕顔）・第二冊（若紫～葵）・第三冊（澪標～明石（二））で、第二冊と第三冊の間に榊～明石（一）の記事を欠くので、もと四冊本のうち第三冊を欠いたものと考えられる。同本には須磨（二）・明石（二）に独自本文が見られる。37陽明文庫本は、外題がなく、巻首に「源氏外傳巻之上（中・下）」とある。構成は、上巻（序・桐壺～夕顔）・中巻（若紫～葵）・下巻（榊～明石（二））となっている。

なお、29岡山市立中央図書館本は、二冊本ではあるが、上巻（序・桐壺～夕顔）・下巻（須磨（一）～明石（二））という構成で、若紫～榊を欠く。おそらく、本来は10書陵部本と近い巻編成になる三冊本であったもののうち中巻一冊を欠く零本であろう。この本は中国銀行頭取であった公森太郎氏の旧蔵書で、「山田文庫」「麗藻圃」の印と「三門文庫」のラベルを有する。もとは漢詩人として知られる山田方谷（文化二年〈一八〇五〉～明治一〇〈一八七七〉）の手沢本と見られる。『国書総目録』には「延享五写」とあるが、延享五年（一七四八）の書写を示す奥書はなく、末尾に延享元（一七四四）年の湯元禎（湯浅常山）の奥書のある本である。40初雁文庫本は、西下経一氏がこの本を昭和四年に写した新写本である。巻末に

付された西下氏の識語には、「この本と同じ奥書のある写本を山陽新聞の野田氏蔵する由」「廣島高師本は湯元禎の奥書あり」云々とあって、他の二伝本の存在にも言及している。しかし、目下両本とも所在が知られない。三冊本のひとつである45光丘文庫本については、次節で述べる。

次に、五冊本は、23大阪大学本・25石崎文庫本・33正宗文庫本・49鍋島文庫B本の四本がこれにあたる。49鍋島文庫B本の巻編成を記すと、第一冊（序・桐壺～帚木）・第二冊（空蟬～末摘花）・第三冊（紅葉賀～葵）・第四冊（榊～明石（一））・第五冊（澪標～明石（二））である。33正宗文庫本は『蕃山全集』本の底本とされたものだが、二巻五冊の編成で、上天（序・桐壺～夕顔途中）・上地（夕顔途中～若紫）・上人（末摘花～葵）・下乾（榊～明石（一）途中）・下坤（明石（一）途中～明石（二））となっており、もともとは葵までを「巻之上」、榊以降を「巻之下」とする（第一・第四冊冒頭に内題がある）二巻構成で、便宜上、上巻を三冊、下巻を二冊に分冊したものと見られる。なお、第一冊には、空蟬・夕顔巻に親本以前からのものと見られる錯簡と一部本文の重複が存する。23大阪大学本・25石崎文庫本の二本は現在未調査である。

さて、最も一般的な二冊本の場合も、どこで分けられているかによって、いくつかの種別がある。たとえば、11池田家文庫本と56稲賀本Aは、上（序・桐壺～末摘花）・下（紅葉賀～明石（二））、14筑波大学A本は、上（序・桐壺～若紫）・下（紅葉賀～明石（二））、26の岡山県立図書館本・50桃園文庫A本・53桃園文庫D本は、上（序・桐壺～紅葉賀）・下（花宴～須磨（二））、41佐野文庫本・52桃園文庫C本・54桃園文庫E本は、上（序・桐壺～葵）・下（榊～明石（二））というように、かなりまちまちである。一冊本であっても、42河野美術館本は、巻首・巻尾題があって、上（序・桐壺～葵）・下（榊～明石（二））の二冊本を合冊したものと知られ、51桃園文庫B本も冒頭に桐壺～葵、榊～明石（二）と分けた目録を置くので、同様の二冊本を合冊したものであること明らかである。48鍋島文庫A本も、葵巻の後に奥書を有しており、やはり同じ編成の二冊本の合冊である。7静嘉堂文庫A本にも、葵巻のあとに白紙が一丁あって、そこがもとは巻の切れ目であったことがわかる。また、46永井本と47盛岡公民館本は、紅葉賀末尾で改丁（47は遊紙二丁をはさむ）していて、そこが本来上下二巻の分かれ目であったことがわかる。なお、43弘前図書館本は葵巻までの零本であるから、二冊本の上巻である。これまで調査しえた一冊本で、合冊の形跡が見られないのは、30村上文庫本のみと言ってよく、ほとんどが本来二冊本の合冊本なのである。

以上のような状況であるから、『源氏外伝』の巻数を代表させるなら二巻とすべきで、冊数は不定だが、あえて言うなら、最も一般的な二冊本で代表すべきだろう。したがって、『国書総目録』などに「四巻四冊」とあるのは、「二巻二冊」とするのがよかろうと思われる。

ところで、ここで、「三十幅（みそのや）」本について触れておく。1国会図書館A本・2国会図書館B本・6内閣文庫C本・15筑波大B本がこれに属する写本である。「三十幅」は、大田覃（南畝）が編纂した叢書である（享和三年〈一八〇三〉序）。大正六年に国書刊行会から四冊本として活字刊行されるまで版行されず、いくつかの写本が伝わっている。その巻十五・十六の二巻が「源氏外傳上（下）」にあてられているのである。上巻（序・桐壷～葵）・下巻（榊～明石（二））の巻構成である。寛政四年（一七九二）の大田覃の奥書がある。2国会図書館B本と15筑波大B本が二冊本の写本であり、1国会図書館A本はその合冊本、6内閣文庫C本は下巻のみの零本ということになる。なお、活字本「三十幅」は、昭和十四年に大東出版社から覆刻されている。

三　流布本系と異本系

『源氏外伝』に、通常の流布本の他に、それよりもかなり分量の多い異本系統の本が存在することが、早くに報告されている。すなわち、石崎又造氏が、神山閏次氏蔵本を翻刻して解説を加えた『源氏物語蕃山抄』（昭10　巧藝社）の刊行と、『文学』第四巻・第七号（昭11・7）に発表された論文「異本源氏外傳の發見と流布本外傳の識語に就いて」である。前者の解説によれば、神山本は、上下二冊の写本で、題簽は剥落して判読不能。小口に「源氏抄」とある由で、『源氏物語蕃山抄』というのは石崎氏が仮に付けられた書名である。この本は、流布本に比して項目数が二十数条多く、引用された『源氏物語』本文や評語の文章も、流布本より分量が多くなっている。流布本にない胡蝶巻の記事があるのも特色である。また、榊巻の第一項目の評語の途中から第二項目の見出しまでを脱落し、多くの本でその第二項目の見出しを直前の葵巻の末尾に混入するという、流布本に共通する混乱が存在しないという特色がある。上巻（序・桐壷～葵）、下巻（榊～藤裏葉）という巻構成で、須磨（二）・明石（二）を明石（一）の後に置き、下巻冒頭の榊の後が、須磨（一）・明石（一）・須磨（二）・明石（二）という順になっているのも大きな特徴である。この異本は、流布本の形態を増補・改訂したものと考えることもできそうだが、石崎氏は、そうではなく、流布本はこの異本を簡約・校訂したものと考えておられる。

この神山本と同系統の本に、京都大学図書館所蔵の『源氏御抄』（中院家旧蔵）があることを石崎氏は指摘され、校合に用いておられる。同書については、それより少し早く重松信弘氏が論文「中院家と蕃山との源氏学」（『文学』第二巻・第九号）で紹介しておられ、流布本『源氏外伝』との関係については、やはり「明かに外傳に誤脱又は簡約の手を加えたと思われるものがあって、御抄が外傳に増補したものではないらしい」と述べておられる。この本は、明石（一）で終わっていて澪標以下の記事がなく、後半約五分の二を欠く零本である。

前掲大津有一氏の「注釈書解題」（『源氏物語事典』下巻所収）に

よれば、「神山氏蔵本は、今は東京大学図書館へ入った」とあるので、神山本は東京大学付属図書館現蔵であるようだ。これと京都大学付属図書館中院文庫蔵『源氏御抄』の二点が異本系統の『源氏外伝』とされているのであるが、先に掲げた『国書総目録』にはどちらの本も載せられていないようである。この二点は、いまだ実見の機会を得ていないが、ともに重要な伝本としてリストに加える必要がある。

ところが、実は、異本系統の『源氏外伝』はこの二本だけではなく、先に列挙した諸伝本の中にも存在するのである。

ひとつは、45光丘文庫本である。同本は、三冊本で、上（序・桐壺）・中（末摘花～須磨（一））・下（明石（一）～藤裏葉）の構成であり、須磨（二）・明石（二）は明石（一）の後に置かれている。『源氏物語蕃山抄』の本文と比較するに、巻序の一致のみならず、流布本にない独自項目はすべて備えており、榊巻冒頭の項目における脱落もない。明らかに同系統の本である。各冊とも、外題・見返し題に「源氏外傳　上（中・下）」とあって、流布本系で最も一般的な書名と同じである。

もうひとつは、57稲賀B本である。同本は、外題に「源語外傳上（下）」とある二冊本で、巻首に「本山文庫」の朱印がある。上（序・桐壺～夕顔）・下（榊～明石（一））の構成で、若紫～葵と澪標以下を欠く。背小口に「源氏外伝　二冊ノ上（下）」とあるので、早くから二冊本として扱われてきたようだが、おそらく本来四冊本の第一冊と第三冊にあたる零本と思われる。この本も、下巻冒頭の榊巻の第一項目には流布本に共通してみられる脱落を持たない他、『源氏物語蕃山抄』の独自項目をすべて有している。明らかに異本系統の本である。第二冊（若紫～葵）と第四冊（須磨（二）～藤裏葉）の二冊は早くに失われたものと見られるが、場合によっては親本段階ですでにこの形になっていたのかも知れない。

この二本を加えて、現段階で、異本系統と認められる本は、

〔1〕東京大学付属図書館蔵神山閏次旧蔵本
（二巻二冊・小口書「源氏抄」）

〔2〕京都大学付属図書館蔵中院文庫本
（一巻一冊・外題「源氏御抄」）

〔3〕酒田市立光丘文庫蔵本
（三巻三冊・外題「源氏外傳」）

〔4〕故稲賀敬二旧蔵B本
（二巻二冊・外題「源語外傳」）

の四本ということになる。〔4〕の稲賀B本はもと四冊本の第一・三冊本と見られるから、異本系の本も、一冊本・二冊本・三冊本・四冊本と、冊数はさまざまであることがわかる。ただし、〔2〕の中院本は明石（一）までで須磨（二）・明石（二）と澪標以下を欠いているから、完全な本ではない。中院本は、想定される稲賀B本の原形である四冊本の第三冊までに一致する。したがって、中院本は四冊本のうち第四冊を失ったものを写して一冊としたものかと考

えられる。あるいは稲賀B本（またはその親本以前の本）は、中院本と同一形態の本を三冊本として書写し、その第二冊が失われたものである可能性もあるであろう。

従来二点とされてきた異本系統の本が、二点加わって四本存在することが明らかになった。これら各本の本文を詳しく比較調査して、より原形に近い本文を持つ本がどの本であるかを検討する必要があるが、流布本系統の本文との関係の考察も含めて、今後の課題としたい。

四　諸本の奥書（一）―内閣文庫本の奥書―

さて、『源氏外伝』の流布本系諸伝本は、多く何段階にもわたる奥書ないし識語を有しており、その伝来の経緯を知る手がかりになる（異本系統の本には奥書・識語は存しない）。以下、代表的な奥書・識語を掲げてその内容を考察し、あわせて伝本の分類を試みる。

まず、多段階の奥書・識語を有する例として、4内閣文庫A本のものを掲げる（私に句読点を付し、番号と墨・朱の別を示した）。

源氏物語抄五巻、熊沢氏作也。全部五十四巻各抄出也。
○中院前内府通茂撰之五巻となせり。全部抄は今出納大蔵方に存也。
○五巻を今合して四巻とす。（Ⅰ・墨）

源氏物語抄五巻、熊沢氏所作也。曽聞、全部五十四巻各抄出之。中院前内相公通茂潤色之。且擇切於時事者、為五冊也。全部抄者今出納大蔵函蔵之。乃各冊内相自以朱批校之本云。以執斎之本敬写畢。
享保庚子夷則初九　　堯　臣（Ⅱ・朱）

右源氏外伝、得諸丹波国篠山松崎神童之所。
延享元年甲子夏五月廿七日　　湯元禎（Ⅲ・朱）
天明戊申仲秋七　　小艸居士収焉（Ⅳ・朱）

余聞熊沢子源氏外伝久矣。偶見根公詢許、処々借而謄写。徂徠嘗推古今人才焉。今読之愈滋嘆。其識高出人意表。若玩源語者、読之、其益非浅小也。但体裁非外伝。考之、跋中乃非旧称。欲更名曰源語評。
于時天明戊申杪冬　　兎道山樵愷識（Ⅴ・朱）

右源氏外伝、はしめよりわかなの下にいたる。大関括嚢翁蔵本をもて、かたはら朱書の校合并朱跋うつし畢ぬ。且あかしより末紙の墨跋ともに括翁の蔵本にもれ侍りぬ。
于時文政十一のとし卯月初八日　　花鴈園（Ⅵ・墨）

すなわち、次のような六段階の奥書（以下、奥書・識語の類を原則として「奥書」と呼ぶ）が存する。

（Ⅰ）年時不記・無署名奥書
（Ⅱ）享保五年（一七二〇）七月九日・堯臣奥書
（Ⅲ）延享元年（一七四四）五月二十七日・湯元禎（湯浅常山）奥書
（Ⅳ）天明八年（一七八八）八月七日・小艸居士奥書
（Ⅴ）天明八年（一七八八）十二月・兎道山樵愷奥書
（Ⅵ）文政十一年（一八二八）四月八日・花鴈園奥書

（Ⅱ）～（Ⅴ）は朱書で、（Ⅵ）によれば「大関括嚢翁蔵本」にあった奥書を写したものである。（Ⅰ）には年時も署名もないが、内容的には（Ⅱ）とほぼ同じことを記している。

（Ⅰ）と同内容の奥書を持つ本に、14筑波大A本がある。同本には、

源氏物語抄五巻、熊澤氏作也。全部五十四巻各抄出之。
中院前内府道茂撰之五巻となせり。全部抄ハ今出納大蔵方に有之。
五巻を今合して二巻とす。
天明四年歳次甲辰
秋八月上浣
窓邨龍翁寫之

とある。（Ⅰ）の奥書の末尾「五巻を今合して四巻とす」の「四」を「二」に替えて、天明四年（一七八四）八月の年時と「窓邨龍翁」という署名をしている。他に、37陽明文庫本にも（Ⅰ）に近い奥書があり、「全部抄は今出納大蔵方に有之」に続けて「各冊内相朱にて校批之本也。○右五巻今合して三巻となせり。則熊澤家の書を以写し故、仍而書写の誤り他本よりすくなく、秘書たるへし」とある。「熊澤家の書」には、年時・署名のない（Ⅰ）の奥書に、後に触れる堯臣の奥書の一部がまじった形の奥書があったことになる。さらに、43弘前図書館本には、「小橋藤三衛所蔵本奥書抄出左の如し」として年時・署名のない（Ⅰ）の奥書（末尾の「五巻を今合して四巻とす」を除く）を記している。56稲賀A本にも同じ奥書があり、続けて「○五巻を今合して二巻とす」とある。そして、11池田家文庫本には、同じ奥書に続けて「各冊内相朱にて校批之本也○五巻を今合して二巻とす」とあり、丁を改めて「明和七寅春謄写之　土經平」とあって、五巻を合わせて二分冊としたことを記して、明和七年（一七七〇）春の年時と「土經平」の署名がある。「土經平」は、岡山藩士で歴史学者の土肥経平（宝永四年〈一七〇七〉～天明二年〈一七八二〉）で、『源氏花鳥芳囀』などの著書がある。同本の表紙には「土肥遺書」のラベルがあり、経平書写本そのものと見られる。

このように、（Ⅰ）と同じ形の奥書のみを有する本もかなり存するようであるが、末尾の一文「五巻を今合して四巻とす」の「四巻」の部分は、書写本の冊数に応じて自在に変えられている。したがって、4内閣文庫A本の奥書を根拠に四冊本を『源氏外伝』の本来の形態と見なすのには無理があろう。

（Ⅱ）の堯臣の奥書は最も一般的な奥書であり、多くの本が有し

ている（7静嘉堂A本と17清心女子大本は、この堯臣の奥書のみを持つ。55桃園文庫F本もこの奥書のみだが、年時と署名を欠く）。これは、『源氏外伝』成立の経緯を語っているため重要な資料とされる奥書である。「堯臣」は、丹波篠山の藩儒であった松崎観瀾（天和二年〈一六八二〉～宝暦三年〈一七五三〉）。享保五年（一七二〇）は三十九歳。記されている内容は、「源氏物語抄」五巻は熊沢氏（蕃山）の著作であること、もとは五十四巻すべての抄出であったが、中院前内大臣通茂が潤色し、時事に切なるものを選んで五冊としたこと、全部の抄は現在出納大蔵のもとに保管されていること、それは全冊とも通茂が自ら朱で校合した本であること、（Ⅰ）によれば、五巻を合わせて四巻に編集したこと、）執斎の本をもって書写したこと、である。中院通茂（寛永八年〈一六三一〉～宝永七年〈一七一〇〉）は、『岷江入楚』の著者中院通勝の曽孫で、蕃山を道の師とした。『源氏註』五十三冊（京都大学中院文庫蔵）・『源氏物語講釈』五十四冊（宮内庁書陵部蔵）の著書がある。「出納大蔵」は、蕃山の五女さきの夫になった平田職直（もとなお）（慶安二年〈一六四九〉～寛保二年〈一七四二〉。「執斎」は、江戸（明倫堂）の儒者三輪希賢（寛文九年〈一六六九〉～寛保四年〈一七四四〉）。通茂について和歌を学んだ。享保五年（一七二〇）は五十二歳。蕃山が『源氏物語』五十四帖すべてに注を付け、それを通茂が潤色したという記事については、これを疑う重松信弘氏（「中院家と蕃山との源氏学」『文学』第二巻・第九号〈昭9・9〉）、「源氏外伝と中院通茂の源氏註に就いて」『国語・国文』第七巻・第九号〈昭12・9〉）と、石崎又造氏（「異本源氏外伝の発見と流布本外伝の識語に就いて」『文学』第四巻・第七号〈昭11・7〉）との間で論争が展開された。

（Ⅲ）の湯元禎（湯浅常山）の署名のある奥書を持つ本も多い。湯浅常山（宝永五年〈一七〇八〉～天明元年〈一七八一〉）は、岡山藩の儒学者。服部南郭・太宰春台門。延享元年（一七四四）は三十七歳。常山は、『源氏外伝』を「丹波国篠山松崎神童之所」から得たという。「松崎神童」とは、堯臣の子松崎観海（享保一〇〈一七二五〉～安永四年〈一七七五〉）のこと。太宰春台・高野蘭亭門。延享元年（一七四四）には二十歳。十三歳で父に従い江戸に出て春台に入門したというから、丹波篠山では神童の名をほしいままにしていたのであろう。観海のもとから得た本というのはおそらく父堯臣書写本であろうから、（Ⅵ）の奥書にある「大関括嚢翁蔵本」がそうであるように、この常山の奥書を持つ本は本奥書として堯臣の奥書も持つはずである（29岡山市立中央図書館本などが両奥書のみを持つ本である）。

（Ⅳ）の天明八年八月の奥書と（Ⅴ）の同年十二月の奥書とは、ほぼ同時期に記されたもので、「小艸居士」「兎道山樵愷」は誰のことか不明だが、同一人物であろうと思われる。つまり、（Ⅳ）は『源氏外伝』収蔵の日を記したものであり、（Ⅴ）は読後の感想である。（Ⅴ）によれば、樵愷は、早くに聞いていた『源氏外伝』をたまたま「根公詢」のもとで見出して借りて写したという。『源氏物

語』を愛好する者にとって益するところ少なくない書だと讃えた上で、この書は「外伝」の名に合った体裁になっていないので「源語評」と書名を改めたいという。現存本で「源語評」の書名を持つのは、前述のごとく、10書陵部本・32尊経閣本・39内藤家本・44作新館本である。10書陵部本は、確かに（Ⅱ）～（Ⅴ）の奥書を有しており、この「兎道山樵愷」の奥書も存在している。これらの本は、この奥書のある本の書名を継承したものと言えるであろう。

（Ⅵ）の文政十一年の奥書を記した「花鴈園」は、内閣文庫本の書写者と考えられるが、未詳である。「大関括嚢翁蔵本」をもって校合して朱で傍書し、朱の跋も写したという。「大関括嚢翁」とは、下野黒羽藩主大関増業（ますなり）（天明二年〈一七八二〉～弘化二年〈一八四五〉）のことという（正宗敦夫氏「源氏外伝解題」『蕃山全集』第二冊）から、おそらく校合に用いたのは44作新館本であろうと思う。未調査の本だが、『古典籍総合目録』には「天明八小竹（ママ）居士写」とあり、朱書された（Ⅱ）～（Ⅴ）の奥書を有していると見られるのである。ただし、（Ⅵ）の奥書に「はしめよりわかなの下にいたる」とあるのは不審であり、「あかしより末紙の墨跋」は（Ⅰ）の奥書をさすかと思われるが、確認できていない。

五　諸伝本の奥書（二）―堯臣奥書系統本―

内閣文庫本の奥書のうち、（Ⅱ）の堯臣の奥書と（Ⅲ）の湯元禎の奥書を持つ本が流布本において最も普通に見られることを先に述べた。これに加えて、（Ⅳ）・（Ⅴ）天明八年（一七八八）の「小艸居士」と「兎道山樵愷」の奥書を持つ本が、内閣文庫本の校合に用いられた大関増業蔵本であり、10書陵部本が同じ形態であることも前述した。その10書陵部本は、（Ⅱ）～（Ⅴ）の奥書を記した後に、次のような奥書を置く（私に句読点を付す）。

旭翁恵借了介先生源語評。其言曰、読之令人増顔采矣、余受読一再、不唯令心地清爽、将手舞之足踏之。旭翁之言信矣。輙便手親騰写、以蔵于篋笥。但憾原本多錯、脱字極魚魯。即就本書、粗修其條、傍指摘疑者、以竢善本於他日云。

寛政改元己酉孟夏　　吉田桃樹識

寛政元年（一七八九）四月、吉田桃樹の奥書である。桃樹は、吉田雨岡（元文二年〈一七三七〉～享和二年〈一八〇二〉）。江戸の人、幕臣、号時雨園。「旭翁」なる人物から借りた「源語評」を写したものという。「源氏外伝」の書名をふさわしくないとして「源語評」と改めたいと記した「兎道山樵愷」の奥書を持つ本の書写本として、この奥書に「源語評」と記し、外題を「熊澤先生源語評」とするのは実につじつまがあっている。『源氏外伝』を読んで大いに感動した由を記す（Ⅴ）の奥書と、ここに記された「旭翁」の言とはよく似ているので、「兎道山樵愷」と「旭翁」とは同一人物ではないかという気がする。

10書陵部本と同じ奥書を持つ本に、24秋田図書館本がある。外題は「源氏外伝」とあり（目録題には「熊澤子源語評」とある）、四冊

本であることなど、10書陵部本と形態は異なるが、前述した本文上の類似に加えて、奥書からも同類の本であることは疑いない。なお、10書陵部本には、桃樹の奥書の後に、「片玉集」の編者藍川正恭の長い奥書が存する。引用は略すが、年時は寛政四年（一七九二）八月である。

次に、大田南畝編の「三十幅」本の奥書を見る。昭和十四年大東出版社刊の活字本によって見るに、（Ⅱ）堯臣・（Ⅲ）湯元禎の奥書を記した後に、次のような南畝の奥書を載せる。

源氏外伝二巻、備前井仲籠潛所レ蔵也、上巻倩二義空法師筆一、而下巻則自書、以蔵二于家一、湯之祥元禎所レ謂松崎神童者、吾師観海先生松崎君脩惟時也、時先生歳十二、

寛政四年壬子暮春十一日　大田覃識

一覧之余、叨加二朱批一耳、　覃　又識

寛政四年（一七九二）三月十一日付の奥書と、校合終了時の奥書とが記されている。正宗敦夫氏によれば、「井仲籠」は「井仲龍」の誤で、井上四明のことという（前掲「源語外伝解題」）。井上潛四明（享保八年〈一七二三〉～文政二年〈一八一九〉）は、越後の人だが、岡山藩儒井上蘭臺の養子となり、岡山藩に仕えた。「義空法師」は伝未詳。南畝は若くして江戸で松崎観海に入門している。湯浅常山の奥書にいう「松崎神童」とは、我が師観海であると誇らしげに言っているが、「時先生歳十二」とあるのは、何を基準に言っているのであろうか。観海十二歳の年は、元文元年（一七三六）である。

堯臣・元禎の奥書に続けて南畝の奥書を持つ本は、「三十幅」の書写本の他に、東京大学付属図書館本があることが報告されている（大津有一氏「注釈書解題」、伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』。ともに前掲。ただし、未調査のためA～Dのどの本かは不明）。また、51桃園文庫B本にも同様に堯臣・元禎・南畝の奥書があり、続けて、

右源氏外伝二巻太田氏所蔵也。手自謄写以蔵于家

寛政十有一年己未夏鶉月良辰真崎保長

という、寛政十一年（一七九九）六月の「真崎保長」なる人物の奥書を記す。この本は、扉題の肩に「篤斎叢書」とあり、「阿波国文庫」「不忍文庫」等の印がある二巻一冊の本である（これが徳島光慶図書館旧蔵本かも知れないことは前述した通り）。

次に、『蕃山全集』の底本となった33正宗文庫本の奥書を検討する。同本には、（Ⅱ）の享保五年堯臣の奥書と、次のような奥書が存する（私に句読点を付す）。

余嘗聞、蕃山先生罷仕在京之日、始采国読之、而至源語。喟然歎曰、本邦王朝之盛、其礼楽之可観者頼有此書。乃為之解、以授亜槐源公通茂云。余心久願得其本頃、偶捜某氏所蔵、見有源公所抄其解之本、而乞得借帰。則家大人乃為手写以賜余。然所恨、原本校讐未精差、謬頗多。余暇日一過之次、姑(暫)以愚意訂改。而尚俟它日遇好本考正矣。余雅(難カ)源語、而又欽先生之為人矧此本出於家大人手謄之賜者乎。謹以珍襲蔵于筐中。家大人時年七十、健実猶能作蠅頭字。

天明四年甲辰冬十月　　高昶拝識

天明四年（一七八四）十月の「高昶」の奥書である。「高昶」は、漢学者で書家としても知られる高安蘆屋（生没年未詳。寛政年間〈一七八九～一八〇一〉没）と考えられる。菅甘谷・中井竹山門。版本の版下の筆を執ることが多かった。蘆屋が某氏のもとで見出した『源氏外伝』は、堯臣の奥書のみを有する本であった。この33正宗文庫本と同様、堯臣と高昶の奥書を有する本に、41佐野文庫本と42河野美術館本がある。42河野美術館本には、高昶の奥書の後に一丁遊紙をはさんで、

此ひとゝちは天保の八とせ長月はかりにうつしをへぬ。よみときかたき處々いとさはにて、これはかゝらむなとおもひよれるもあれと、さかしらにあらためむもをこなれは、さて□（中損）ぬ。後によきを見出たらんとき、ふたゝひ物しつへくなむ。

松隈處

という、天保八年（一八三七）の書写を示す松隈某の奥書がある。したがって、『古典籍総合目録』や『今治市河野信一記念文化館図書分類目録』（昭49）にこの本を「天明四高昶写」とするのは、誤りとは言えないが正確でない。

六　諸伝本の奥書（三）―非堯臣奥書系統本―

これまで検討した伝本は、いずれも享保五年堯臣の奥書またはそれを写した湯元禎の奥書を有する系統の諸本であったが、他に、これらの奥書を持たず、別の奥書を載せる伝本が存在する。次には、それらを検討する。

まず、52桃園文庫C本の奥書を見る。

源氏物語抄五巻、熊澤氏之作也。全部五十巻各抄出也。中院前内相通茂撰之て五冊となせり。全部抄は今出納大蔵方に有之。各冊内相朱にて校批之本也。

寛保四年丁卯二月二十五日　　石維国手写（A）

右以備前侯儲君新之允君伝石田鶴右衛門維国蔵書令謄写畢。

文化六年己巳孟秋　　志賀親信（B）

本文と伝と所を失ひ、転雑甚し。欠文あるひは文字の相違一段ごとに多ふして、文義不一貫。故に不可弁知。転写の誤なるへし。依之大略本文と伝とをわかつて、余は本のまゝ写置也。追而源氏の本々を以て可推考のみ。

文化十二十二月廿七日　　佐藤（C）

ふみかつせるとふまりみつのとし写之　　永田（D）

辰三月十四日、石維国写。禁楽中之歴々手写せし者也。（E）

私に（A）～（E）の記号を付したように、五段階から成る奥書である。

（A）は、先に検討した（I）の奥書と酷似しているが、寛保四年（一七四四）二月二十五日の年時と「石維国」の署名がある点が異なる。「石維国」は（B）の奥書に見える「石田鶴右衛門維国」と同じで、石田維国（つなくに）（正徳四年〈一七一四〉～安永三年〈一七七四〉）

のこと。岡山藩士。太宰春台門。寛保四年（一七四四）は三十一歳。おそらく、親本にあった奥書を写し、書写年時を記して署名したものであろう。

（B）の文化六年（一八〇九）七月の奥書を記した「志賀親信」は伝未詳である。「備前侯」は岡山藩主池田斉政、その「儲君」の「新之允君」は、池田斉輝（寛政九年〈一七九七〉～文政二年〈一八一九〉）である。池田家の嫡子であり、将軍家斉に認められていたが、家督を継ぐ前に二十三歳で夭折した。文化六年（一八〇九）はまだ十三歳であった。この本は、備前侯儲君が石田維国に伝えた本を写したものであると言っているのであろう。維国は、おそらく斉政が嫡子斉輝に与えた『源氏外伝』の本を賜わって書写したのであり、それを親信が借り出して写したというのである。維国は「奇書あるを聞けば百方求めて手写し、国稗史より家集に至る迄悉く記録す」（田中誠一編著『備作人名大辞典』〈昭49　臨川書店覆刻〉）という人であったという。

（C）は、文化十二年（一八一五）十二月二十七日付けの「佐藤」なる人物の書写奥書で、文章の乱れや誤写の多いことを嘆いている。続く（D）は、翌文化十三年（一八一六）の「永田」なる人物の書写奥書である。「佐藤」も「永田」も誰のことかわからない。

そして、（E）は、（A）と同じ石田維国の奥書であるが、（A）の翌年と見られる辰年三月十四日の日付がある。親本は、宮中の歴々、すなわち有力公家たちの筆になる寄合書の本だと言っている。この日付の約一年のずれがいかなる事情を示すものかはわからない。

これらと同じ奥書を有する本に、48佐賀県立図書館A本がある。ただし、同本には（E）の奥書がこの位置にはなく、葵巻の末尾にある。葵巻は、二冊本である52桃園文庫C本の上巻末にあたる。一冊本である48佐賀県立図書館A本も二冊本を合冊したものと見られるから、本来は上巻末に書かれていた奥書なのであろう。それにしても、下巻末の奥書よりも一年余り後の日付になっていることには疑問が残る。

この石田維国書写本は、普通の流布本系の本とはやや異なる本文を持つ。52桃園文庫C本に添えられた池田亀鑑氏のメモには、「本文ハ大體流布本ナレドモ、所謂御抄本トモ全ク異レリ、第三異本トシテ源氏外傳研究ノ有力ナル資料タルベシ」とある。あえて48佐賀県立図書館A本を「略注『源氏外伝』」の底本に選んだ所以である。

さて、もうひとつ別種の奥書を持つ伝本群がある。次のようなものである。47盛岡市中央公民館本の巻頭にある奥書を引用する。

こは蕃山氏のおもひをのはへつゝ、中院故内大臣の君につたへ奉りしを、ひめおかせたまひぬれは、世人しらすなむありける。やつかりかいにしへこのめるこゝろさしをめつとて、或人の得させぬるを、あやまれりとおほしき文字たゝしはへるそおほけなりけり。もとつふみ見す、さてたゝ心のまに〳〵かうかへ侍るなれは、かさねてあけつろひさたむへきにこそ。

ゆたけきまつりことたふことせ

ふつきはつかまりいつかの日

平勝定しるす

寛政二年（一七九〇）七月二十五日の「平勝定」の奥書である。仮名書きの奥書から見て、「平勝定」は儒学者ではなく、国学系の学者らしいが、伝未詳である。これと同じ奥書を有する本は、他に、26岡山県立図書館本・46永井本・50桃園文庫A本・53桃園文庫D本がある。静嘉堂文庫蔵の一本も同じ奥書を有するという（前掲「注釈書解題」『源氏物語事典』所収）。この奥書は巻末ではなく、巻頭に置かれていることもひとつの特色である。

おわりに

『源氏外伝』は、『源氏物語』享受資料として非常にユニークな書でありながら、これまで国文学者にはあまり注目されることがなく、いまだほとんど研究らしい研究は行なわれていない。本稿では、『源氏外伝』研究のための基礎作業として、現存諸伝本の大まかな分類・整理を試みたわけであるが、まだ未調査の本が多く、詳しい検討はなお今後の課題とせねばならない。しかしながら、約六十本の伝本のうち、これまで二本しか知られていなかった異本系の伝本に、新たに二本を加えることができたことは現段階までの調査で得られた大きな成果であった。流布本系諸本の伝来に関しては、享保五年（一七二〇）の堯臣の奥書と、それを写した延享元年（一七四四）の湯元禎の奥書を持つ本が最も一般的で、この系統の本（堯臣奥書系統本）とそれらの奥書を持たない系統の本（非堯臣奥書系統本）とに大別されることがわかった。異本系の本も含めて、各系統本文の特色を考察するのも、また今後の課題である。

〔付記〕諸本の調査にあたっては、所蔵先の図書館・文庫の各位にさまざまご便宜をはかっていただいた。厚く御礼申し上げる次第である。なお、奥書に見える学者の伝記に関しては、長澤規矩也監修・長澤孝三編『漢文学者総覧』（昭54　汲古書院）と國學院大學日本文化研究所編『和学者総覧』（平2　汲古書院）を参考にするところが多かったことを記しておく。

An Introduction to a Study of Various Manuscripts of "*Genji-Gaiden*"

Yoshinobu SENO

"*Genji-Gaiden*" critically deals with "*The Tale of Genji*" from Confucianisumical point of view whith was founded by Banzan Kumazawa in the 17th century.

Until the end of 19th century, this work had never been published. This work has about 60 manuscripts.

This paper tries to classify these manuscripts, considering them bibliographically.